日文教授用資料[小・中学校社会]

次期学習指導要領が見えてくる!!

文部科学省
社会・地理歴史・公民
ワーキンググループ ポイント解説



日文のWebサイト
日文

※本冊子掲載二次元コードのリンク先コンテンツは予告なく変更または削除する場合があります。
本資料は、一般社団法人教科書協会「教科書発行者行動規範」に則り、配布を許可されているものです。

心が動く、その先へ。
日本文教出版

ワーキング
グループ委員

座談会



筑波大学 名誉教授
井田 仁康 いだ よしやす
『小学社会』『中学社会 地理的分野』著者



岡山大学大学院 教授
桑原敏典 くわばら としのり
『小学社会』『中学社会 公民的分野』著者



昭和女子大学附属中学校・
高等学校 校長
升野伸子 ますの のぶこ
『中学社会 公民的分野』著者



兵庫教育大学大学院 教授
山内敏男 やまうち としお
『小学社会』著者



広島大学大学院 教授
永田忠道 ながた ただみち
『小学社会』著者

社会・地理歴史・公民
ワーキンググループから
次期学習指導要領を読み解く

1 高次の資質・能力とは

井田 今回のワーキンググループの会議は、小・中・高校が10回ずっと一緒の場でかつ地理・歴史・公民も一緒というのは私の記憶では初めてで、今までだと1回か2回集まってから校種、分野に分かれていました。そのため、最終的にどうまとまったのかがとても曖昧、よく言えば丸く収まったと思います。

さて、高次の資質・能力ですが、最後第10回の会議の寸前に企画委員会で高次の資質・能力という文言を使うことはやめるという話があって、取りまとめ案を見ると、高次の資質・能力という文言は出てきていません。では何が高次の資質・能力かということになるのですが、知識及び技能と思考力、判断力、表現力等という形で分かれていて、当初から高次の資質・能力については、その2つが示されており、知識及び技能では「統合的な理解」、思考力・判断力・表現力等については「総合的な発揮」といい、これは残りました。

では、「統合的な理解」や「総合的な発揮」とは、どういうことなのかを説明していきましょう。「統合的な理解」は、社会的事象に関する個別の知識及び技能を統合して社会での様々な場面で活用できる概念として習得された状態を示しているというものです。「総合的な発揮」は、社会的事象の意味や意義、特色や相互の関連を考察した社会に見られる課題を把握して、その解決に向けて構想する際の社会的な視点や方法などを示しています。

私からは地理的な視点で話させていただきます。「統合的な理解」というのが今までの学習の中で、様々な項目が出てきていますけれど、例えばアジア州やアメリカ州などの世界の諸地域を学習し、その上で、それを総合的、概念的、抽象的に捉えていく概念ではないかと考えられています。

桑原 この高次の資質・能力という言葉が最初、私は本当にすごく違和感があって、こんな高次という言葉を使うと、先生方にとってみたらすごくレベルの高い子がここに到達すればいいことであって、一般の授業の中ではちょっと難しいのではないかというイメージを与えるだろうなと、最初からものすごく違和感をもっていました。でも、これをなんとかわかるようにもっていかないといけないと、会議を重ねていくごとに私の考えとして強くなっていきました。

先ほどおっしゃられた、「統合的な理解」と「総合的な発揮」という言葉で表されているのですが、これがやっぱり階層構造で考えるようになってきているので、ものすごく複雑な概念として提示されているところが気になるところです。どうしてもそれを出すためには、その個別の事象を超えた一般的な概念による事象の把握であるとか、一般的な見方を踏まえた事象についての思考であるとか、そういったものを促すためにこの言葉をもってきたのだろうなと思っております。ですので、これをもってきたということは、従来の暗記中心、個別の事象中心の社会科をなんとか今回の指導要領で克服したいというのが意図として見えてきたような気がします。

升野 「高次の資質・能力」について、公民的分野における思考力・判断力・表現力等の部分では、地理と歴史の分野にはない、「具体的な事例を挙げて」という語が5か所も登場します。

公民は概念や仕組みの学習をしますが、概念が、現実の事象や仕組みのどういう面に表れているかということがわかっていることを、高次ととらえるのかなと思いました。例えば民主主義の学習をした後、議院内閣制という具体の中に、民主主義という抽象的な理念がどういうふうに反映されているかということを、考えることかと思ったのです。

山内 現状で私がイメージしているのは中項目、いわゆる大単元レベルでのめざす姿なのかなという印象です。ここに書いているということは、ある意味めざすゴールとしての姿と捉えると、理解しやすいと思っています。ただやはり先ほどから話があるように、レベルがかなり高いので実際にこれをどう捉えていくかということがやはり解説編でしっかりと記述されていかないといけないということです。



ポイントは「統合的な理解」と「総合的な発揮」

永田　私の立場からすると、この度の高次の資質・能力というのは、あえて高次という言葉を外した状態でお話しますけれど、基本的にはもう社会科は地理とか歴史とか公民とかバラバラではなく、それらを全て包括した資質・能力という在り方こそが改めて大事であると、中央教育審議会の中でも発言しましたし、他の委員の方々からも発言があったかと思います。そのため高次という言葉を、例えば包括的とか包摂的と置き換えられないかと発言もしましたが、自分自身で理解するとしたら、やはり包括的な資質・能力や包摂的な資質・能力であれば、説明がつきやすいと考えています。

2 新しい見方・考え方とは

井田　新しい見方・考え方として地理の場合は、地域の空間的な広がり、地域の環境、地域の関係という大きな3つのまとまりを考えました。そこで外してはいけないのは「地域」という言葉です。地理を学習する意義は、地域ごとに現れ方がどう違うのか、地域ごとにそれを考えることによって、地域により様々なものへの対応の仕方が違うことを理解することです。むろん、地域を学習し一般化を追究していくことも地理学習の意義ですが、地域を前提にあるいは基盤にその地域の特色や一般化を考えることが重要になってきます。

桑原　公民の専門からすると、現行の見方・考え方というのはとてもわかりやすく、「社会を見るメガネ」という言い方をしていたのです。それがピッタリ当てはまっていました。要するに個別の事象を捉えるときの枠組みと言いますか、そういう枠組みで世の中を見ると、それぞれバラバラに見えた事象に共通点があったり、あるいはAで考えたことがBでも使えたりということで、様々な課題解決ができる手立てとして見方・考え方が使われていると思うのです。

井田先生がおっしゃられたように、今回の新たなというところでは、すごく方法的な概念が中に入ってきて、私としてはすごく違和感があって、こんなに方法的な概念を入れて形式的にならないかというのを少し心配しています。その方法的概念を入れたのはなぜかというと、結局それぞれの教科で学んだ本質を、社会で起こっていることを実際に見るために、使うためにつないでいくようなものとして見方・考え方を設定しているのだろうと考えています。だから、どうしても知識を使うためのツールみたいなところを入れざるを得なかった。そのために視点と方法という言葉が使われているのだろうという解釈をしています。

升野　方法というフレーズが出てきたことは、中学生にとって非常に意味があることだと思っています。私は、中学生はやり方を知らないとどう考えてよいかがまだわからない発達段階だと考えています。やり方を知れば、別の事象にも応用ができます。そういう意味では「方法を知っている」ということが将来につながる資質・能力の育成につながると思います。

また、従来の見方・考え方というのは非常に狭い範囲だと思っています。社会を見る視点には、効率と公正、対立と合意以外にも様々なものがあり、ケアや共感など様々な見方や考え方があることを提示したいと思っています。

山内　少し着目したい点で言いますと、言説という言葉が入ったことが、最初どうなのだろうと思いました。例えば、歴史で考えてみますと、人物に対しても時代によって捉え方が変わっているところが結構あります。

また、情報という視点で少し偏った話になりますが、SNSや情報化社会、そうしたものが社会科としてどうなのかと見ると、歴史ではこういうことが言える、地理ではこういうことが言える、公民ではこういうことが言えるみたいなところがこれから整理されていくと非常によいのではないでしょうか。情報を手がかりにしながら、社会科だけではなくて総合的な学習（探究）の時間も関わりながら、少し広い意味で資質・能力的なものも含めて獲得していく、めざされていくというものが新たに付け加えられたのかなという印象をもっています。

もう1つは、現行の学習指導要領で言いますと、見方・考え方を働かせてという言い回しが、今回は用いるとなっており、そのことが視点や方法を用いて考えたり表現したりするという言い回しになってきているのだと思います。つまり、見方・考え方、それ自体を獲得するのではなくて、それを使ってどうするのかということです。

永田　本件については、私の中で2つの言葉が出てきています。中学校の地理的分野では今も大事に使われている言葉だと思いますが、「地方的特殊性」と「一般的共通性」という言葉です。新しい見方・考え方では、「地方的特殊性」をなるべく最小化して「一般的共通性」がもっとわかりやすくなるような見方・考え方をどう運用していけばよいのかということになるのかとも考えています。

どちらかというと今のそのような方向性は、算数・数学や理科はそれがやりやすい教科だと思います。理論や公式をうまく使えば最短距離で答えにたどり着くことができるし、例えばAIを考えたときも、やはりその最も効率的な最短距離への魅力的な手立てではあることは間違いないのですが、社会科はそのような新しい見方・考え方が本当に馴染むのか、馴染ませるべきなのかは、検討と議論の余地がまだおおいにありそうです。

3 内容の精選

井田　今まで日本地理では、7つの地域区分で学習をしていましたが、例えば、自然環境に関して、北海道と東北がまとめられるとするならば、まとめて学習をしましょうというような観点で授業時間を短縮していくというのが現在の考え方になってきています。

桑原　全体的にはやはりこれまでの網羅的な教え方というのを見直していくことが1つ大事なところで、課題を解決するにあたって必要な知識のみを取り上げていくことが大切になっていくだろうと思います。例えば公民で言うと、憲法を学ぶというと憲法の成立から順番に学んでいくことが本当に憲法についてわかることになるのかというところを見直して、憲法って一体何のためにあるのだろうと、国民にとって憲法がどんな意味があるのかということを考える中で必要な知識を抑えていくのです。

憲法にしろ国会にしろ、あるいは市場経済にしろ押さえておくべき肝心な知識はそれほど多くはないと思うのです。発想の大きな転換が必要だろうと思います。

升野　実際に授業をやっていると、例えば市民革命のところや国際連合のところなど、いくつか歴史的分野と重複しているところがあると思います。また、需給曲線を使って現実の物の値段が上がったり下がったりすることを説明しようということが教科書などで見られるけれど、経済学的にはあまり意味がありません。

社会を見るメガネから社会を見る視点と方法へ

そこは思い切って削除してもいいような気がします。需給曲線は、他の条件が一定であればという正し書きが必要になってくるからです。

井田　中学校の公民的分野は、結局のところ歴史的分野の授業が延びてしまって、現実的に既にかなり圧縮されているのではないでしょうか。とすると、自ずと圧縮できるところが決まってくるかもしれませんね。

山内　歴史的分野の現代史と公民的分野の現代社会を一緒にしてしまうということをやれば、その対応はできると思います。ただ、それまで子どもたちは地理的分野と歴史的分野とで、総合的な学習（探究）の時間との役割分担みたいなことから一つに収れんされたりしていく、もしくは学んでほしいような形で示されているわけです。6年生の歴史は、最初縄文、弥生の生活の姿から入っていきますが、今までは土器の形や食生活など丁寧に比較し、理解していくところから入っていきましたが、取り上げ方を変えていかないとおそらく時間が生み出せないと思います。

永田　社会科がなぜいろいろな分野が集まって一つの教科になっているのか。それぞれの分野ごとのよりよいアプローチを上手に折り混ぜながら、いかにハイブリッドにできるかというのが元々の社会科の考え方です。前に述べた「地方的特性」と「一般的共通性」についても、どちらか一つではないところが重要です。フレキシブルだったり、融通が利くだったり、ハイブリッドのあり方を社会科では精選の中でどうするかが鍵となります。

特に小学校は地理や歴史などの関係する学問分野や学問領域の中でそのバランスをしっかり取らないと様々な問題が出てきます。その中で最も大事なことの一つとして例えば、升野先生からの「合意はできなくても妥協は」という言葉が私はとても重要かと思っています。

網羅的な教え方からの脱却

で個別的な事象を捉える学びを積み重ねてきて、公民的分野で演繹的な学習になるわけですから、それがどこまで凝縮できるかということはあります。もちろん歴史的分野も演繹的な考え方が実は必要で、例えば鎌倉時代で最初に武士から入っていくと思うのですが、そこから文化ではその政権の、ある意味強引に文化へ反映されているという、その政権の性質と文化を関連づけていくことを求めています。そこで網羅的なものをある意味少し押し出すことができると同時に時間も短縮するから、そのあたりがねらわれているのかなということがあります。

小学校に目を向けますと、既に具体的に示されていて、例えば4年生の県の特色がある地域を3つから2つの地域に構成したり、5年生でも情報のことを体系的に扱うということで、総合的な学習（探究）の時間との役割分担みたいなことから一つに収れんされたりしていく、もしくは学んでほしいような形で示されているわけです。6年生の歴史は、最初縄文、弥生の生活の姿から入っていきますが、今までは土器の形や食生活など丁寧に比較し、理解していくところから入っていきましたが、取り上げ方を変えていかないとおそらく時間が生み出せないと思います。

永田　社会科がなぜいろいろな分野が集まって一つの教科になっているのか。それぞれの分野ごとのよりよいアプローチを上手に折り混ぜながら、いかにハイブリッドにできるかというのが元々の社会科の考え方です。前に述べた「地方的特性」と「一般的共通性」についても、どちらか一つではないところが重要です。フレキシブルだったり、融通が利くだったり、ハイブリッドのあり方を社会科では精選の中でどうするかが鍵となります。

特に小学校は地理や歴史などの関係する学問分野や学問領域の中でそのバランスをしっかり取らないと様々な問題が出てきます。その中で最も大事なことの一つとして例えば、升野先生からの「合意はできなくても妥協は」という言葉が私はとても重要かと思っています。

4　分野横断について

井田　大きく2つあると思います。1つは先ほどから永田先生が話しているように社会科としてのつながりが今の状況だと小学校はあっても中学校がなかなか見えない状況です。そういう意味では、地理的分野と歴史的分野がいかに関わっているかというものを示せるかになります。それが分野横断で、まだ決まってはいませんが、中学校1年の初めと、中学校3年の初めぐらいと、それから中学校3年の終わりぐらいにかけて行うことになりそうです。何回も言いますが、地域が関わっていてそれが社会科なんだということを示すことが1番大きな理由だと思います。

あとは小・中・高等学校のつながりをいかにつけるかということです。最初は小学校とのつながりだし、最後の分野横断は高等学校とのつながりになります。

桑原　今日議論をしていてよくわかったことは、すごく社会科を総合化していこうというか、永田先生がおっしゃられたように、元の社会科に戻りはしないけれども、流れとして結構それが感じられて、分野ごとに分かれる方向ではない方向に進むということをすごく感じました。

この分野横断が設けられたことも含めて、要は分化していくと陣取り合戦になって自ずと授業時間が増えてしまう。とにかく時間を減らして内容を減らして、より学習を深いところに充実させていくというのが1番大きな流れなんだろうと思います。この分野横断を作る意味は、内容を重ねられるところは重ねていって、より学習を効率的にそして深い学習に時間をかけるというところに向かっていくためのものなんだなということが改めてよくわかりました。

升野　地理・歴史・公民といった分野にこだわらず、社会科としてとらえていけばよいのではないでしょうか。学校では社会科の教員として教えているので、科目の独自性より、「社会を捉える視点」が大切だと思います。

山内　分野横断をよりよいものや実質化していくための一つの校種という範囲で考えずに、例えば小・中の接続に関して言いますと、やはり学びのギャップが結構大きくて、小学校だけを考えて展開する、中学校だけで展開するというと、かなり重なりやギャップが存在してしまうので、留意していかなくてはいけないですし、先生方も小学校の先生は中学校、中学校の先生は小学校の解説を見てギャップを生みそうな点を少し意識していただけるといいかなと思います。

例えば中学校で言うとスキルかどうかということも踏まえることが必要であったり、また小学校では、中学校でこれから視点や方法の部分が結びつきや既習事項と対比させて変容といったものが新たに多く加わってきたりするので、そういった点も踏まえ、小学校で何ができるのか、あるいは少し踏み込んでいくのがよいかもしれません。

永田　分野横断は理想的には社会科にとってはすごくいいことなのですけど、これを本当に実現できるかどうかです。その実現可能性ということが、今回の学習指導要領の議論の基盤の中にもあります。深い学びの実装のため、多様性を包摂するための実現可能性の確保ということですが、この社会科での分野横断のあり方が全教科を含めた学校教育全体にとっても試金石となってくると思うのです。

理想論をしっかりと受けとめながらも、あまり細かいところまで悩みすぎずに、その都度に妥協点を見出すことがまさに大切という考え方がありますが、これがある意味、民主主義社会の在り方の一つの方向性だということも改めて言えるのかもとも考えています。

Roundtable discussion

社会科の総合化と学習の深化



撮影：吉村もと

日本文教出版 各種資料のご案内

WEBサイト連載！ 元文部科学省教科調査官からの招待状

学び！と社会２

「社会科教育」という言葉を大切にしながら、エッセイ風に社会科の本質に迫ります。



國學院大學名誉教授
安野　功

学び！と地理

学習指導要領と絡めて地理的分野についてズバリ！内容を解説いただいています。



大正大学教授
中嶋則夫

学び！と公民

学習指導要領と絡めながら、現代社会を取り巻くタイムリーな話題に交互に切り込みます。



福井大学教授
橋本康弘



玉川大学教授
樋口雅夫

新学習指導要領に向けて

自由進度学習　小学校・中学校の接続　探究学習



自由進度学習　小学校・中学校の接続　探究学習

元文部科学省教科調査官が解説！

新刊 子どもによる紛争解決と社会科
―他社との対立を乗り越えるために―



分断の時代に、他者との対話と協働によって対立を乗り越える社会科教育。
分野横断と、小・中・高を通したカリキュラム構想が見えてくる待望の１冊！

編著 埼玉大学准教授
小貫　篤
A5判 160頁 2,200円(税込み)

こちらからもAmazonの注文サイトへ進めます→

次期学習指導要領が見えてくる!!
―文部科学省　社会・地理歴史・公民ワーキンググループポイント解説―

日文教授用資料［小・中学校社会］
令和８年（2026年）11月18日発行

編集・発行人　佐々木 秀樹

日本文教出版株式会社
〒558-0041 大阪市住吉区南住吉 4-7-5
TEL：06-6692-1261
FAX：06-6606-5171

本書の無断転載・複製を禁じます。

CD344111O040

日本文教出版株式会社
https://www.nichibun-g.co.jp/

大阪本社　〒558-0041 大阪市住吉区南住吉 4-7-5
TEL：06-6692-1261　FAX：06-6606-5171

東京本社　〒165-0026 東京都中野区新井 1-2-16
TEL：03-3389-4611　FAX：03-3389-4618

九州支社　〒810-0022 福岡市中央区薬院 3-11-14
TEL：092-531-7696　FAX：092-521-3938

東海支社　〒461-0004 名古屋市東区葵 1-13-18-7F-B
TEL：052-979-7260　FAX：052-979-7261

北海道出張所　〒001-0909 札幌市北区新琴似 9-12-1-1
TEL：011-764-1201　FAX：011-764-0690